

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 2 日現在

機関番号：18001

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25770139

研究課題名(和文) 韓国と日本におけるポストコロニアル文学研究の展開過程に関する比較研究

研究課題名(英文) Comparative study about the development process of the post colonial literary study in Korea and Japan

研究代表者

呉 世宗 (OH, Sejong)

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：90588237

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：韓国と日本におけるポストコロニアル文学研究の展開の相違を、支配/被支配といった二項対立的な認識機制に対して「帝国主義」「植民地主義」「民族主義」をキータームにしながらいかに問題化されたのか、「植民地近代論」を取り上げ、二項対立的な認識機制批判がどう展開していったのか、在日朝鮮人文学に関する研究を取り上げ、二項対立的な認識機制批判がどのように進展しているか、を比較することで明らかにした。研究成果は論文、シンポジウムなどを通じて社会に還元した。

研究成果の概要(英文)：I made it clear by comparing difference in development of post-colonial literary study in Korea and Japan. The following three were compared. (1) I made "imperialism" "colonialism" "nationalism" a key term, and examined how binary opposition-like recognition mechanism such as rule/hi rule was made an issue of. (2) I took up "colony modern theory", and studied how binary opposition-like recognition mechanism criticism was developing in Japan and the Republic of Korea. (3) I took up a study of Japan and the Republic of Korea about Korean resident in Japan literature, and it was analyzed how binary opposition-like recognition mechanism criticism developed in two countries.

研究分野：在日朝鮮人文学

キーワード：ポストコロニアル 在日朝鮮人文学 金時鐘 金石範

1. 研究開始当初の背景

申請者はこれまで、大きく二つの目的のもと研究を行ってきた。

(1) 植民地期に朝鮮半島に持ち込まれた日本語が、朝鮮人の認識、思考、感性に与えた影響と、反対に朝鮮人による日本語使用が言語に及ぼした影響を日本語文学作品を通じて考察した。その際、主に植民地末期に日本近代詩を、学校教育を通じて内面化した詩人・金時鐘(1929~)の日本語詩に焦点を当て、朝鮮人と日本語の関係を考察した。

(2) (1) で得られた知見を基に、植民地期に多く生まれた朝鮮人文学者達の日本語文学作品を分析した。特に1940年代前半の植民地朝鮮において多く生み出された朝鮮人の日本語文学作品に焦点を当て考察を行った。韓国では長らく「親日文学」として断罪されてきたそれら作品の多くは、日本語/朝鮮語、近代的/反近代的、植民地従属的/反植民地的な相反する価値を内在させている。そのような日本語文学作品群の意義や書き手の立場性を「難民」概念を用いながら考察した。以上の目的のもと、研究を進めてきた。

以上の研究は、植民地問題が必然的に惹起する支配/被支配、協力/抵抗といった二項対立的認識的機制を、境界に位置づく文学者や文学作品から問い直すものであった。研究の結果、日韓の文学研究領域において、その認識的機制を問題化する仕方や引継ぎ方に相違があることが明らかになった。ポストコロニアル文学理論を1990年代後半に受容した後、日韓は多角的な観点から二項対立的な認識的枠組みを問うてきた。だが研究の急激な進展は、多角的な観点に加え、研究目的・方法や分析対象の選択等での多様化も伴って、韓国と日本における二項対立的認識機制の問い直し方や研究成果の意義を、共通の地平で検討することを困難にしていた。

そこには両国に固有の問題も存在していた。日本でポストコロニアル問題は、「日本人」から切り離された、「複雑なアイデンティティ」を抱えたマイノリティ(在日朝鮮人、沖縄、アイヌ等)の問題として囲い込まれる傾向がある。そのため「日本人」自身が逆説的に不可視化し、二項対立的な認識的枠組みの一方の側を問うことが困難になる傾向がある。他方韓国でのポストコロニアル研究は、ナショナリズム批判からファシズム研究へ、そして「植民地近代論」と辿りながら「韓国」「民族」「近代」を問うた帰結の一つとして、「主体の解体」という結論を導き、二項対立的認識的枠組み自体を無化してしまう可能性を胚胎させてしまっている。その結果、「抵抗」や脱植民の可能性を問うことも困難にしている。

以上のような状況を鑑み、申請者は日韓間で効果的に機能する理論構築を行うための基盤整備として、90年代のポストコロニアル文学理論受容後の韓国と日本における研

究進展の差異を、二項対立的な認識機制批判の変容過程を比較することで明らかにするという本研究を計画するに至った。

2. 研究の目的

本研究は、韓国と日本におけるポストコロニアル文学研究の展開の相違を、支配/被支配といった二項対立的な認識機制に対する批判の展開過程を比較することで明らかにし、それによって、より機能的な理論構築のための基盤の整備を行うものである。具体的には(1)1990年代の日韓において、二項対立的認識機制が、「帝国主義」「植民地主義」「民族主義」をキーワードにしながら問題化されたのかを比較検討する、(2)2000年以降に日韓で登場した「植民地近代論」を取り上げ、両国の認識機制批判の展開を比較検討する、(3)在日朝鮮人文学に関する近年の研究を取り上げ、現在の日韓において認識機制批判がどのように展開しているのかを比較検討する。

3. 研究の方法

平成25年度は、「帝国主義」「植民地主義」「民族主義」という観点から二項対立的認識機制の問い直しを行った1990年代の文学研究を収集し、日韓の差異を検討する。平成26年度は、2000年以降の「植民地近代論」に関する文学研究を収集し、日韓における二項対立的認識機制批判の展開を比較検討する。平成27年度は、在日朝鮮人文学に関する2000年代中盤以降の研究を収集し、日韓における二項対立的認識機制批判の現在の様相を明らかにする。適宜ワークショップを開催し、専門研究者との議論の場を設けることで論点の具体化・追加・修正を行う。一連の研究成果は、適宜関連学会や研究会、および論文等で公表する。

4. 研究成果

韓国と日本におけるポストコロニアル文学研究の展開の相違を、支配/被支配といった二項対立的な認識機制に対して(1)「帝国主義」「植民地主義」「民族主義」をキーワードにしながら問題化されたのか、(2)「植民地近代論」を取り上げ、二項対立的な認識機制批判がどう展開していったのか、(3)在日朝鮮人文学に関する研究を取り上げ、二項対立的な認識機制批判がどのように進展しているか、を比較することで明らかにした。研究成果は論文、シンポジウムなどを通じて社会に還元した。具体的には以下のとおりである。

平成25年度は主に次の二点を検討した。第一に「帝国主義」「植民地主義」「民族主義」という観点から二項対立的認識機制の問い直しを行った研究論文や文献の収集を日本と韓国で行った。1990年代には、二項対立的な認識機制を問い直しつつも「近代化」は肯

定的に評価する議論「植民地近代化論」(安秉直 1997)も登場しており、そのような研究も含め、関連する先行研究の収集を広く行った。第二に、収集したものの分析を行い、日本と韓国において二項対立的認識論的機制がどのように問題化されているのかを比較検討し、その特徴の抽出と整理を行った。平成 26 年度は、2000 年代以降の韓国の「植民地近代論」を比較検討することで、二項対立的認識論的機制批判が韓国においてどのように展開し、いかなる問題をもたらしめているのかを検討した。具体的には以下の 3 点を行った。

(1) 韓国のポストコロニアル研究が、ナショナリズム批判とファシズム研究を経て、主に 2000 年代に「近代性」そのものを問う「植民地近代」の研究に至っていること、また日本でも同時期に植民地と近代の関係の問い直しが始まっている状況を踏まえ、「植民地近代論」を中心的テーマとする両国の文学領域の先行研究の収集を日本、そして韓国で行った。

(2) 平成 25 年度は 1990 年代の韓国において「帝国主義」「植民地主義」「民族主義」という観点から二項対立的認識論的機制の問い直しを行った。平成 25 年度の知見を基に、韓国における二項対立的認識論的機制批判が「植民地近代論」によってどのように変容していったのかを比較検討した。「植民地近代論」は、「文化ヘゲモニー」論や、植民地内部における抵抗と協力が交差する公共的空間を想定する議論、あるいはそのような領域から排除される「民衆」を指摘する論等に見られるように、ある意味ミクロな観点から人々の行動を注視し、支配/被支配という認識枠組みを問い直す議論となっている。多様に展開するその「植民地近代論」を批判的に検討し、主要概念の整理および理論の再構成、問題点の抽出、研究成果が持つ意義の明確化を行うことで、日本と韓国において認識論的機制批判がどのように展開していったのかを明らかにした。

(3) 得られた知見を踏まえ、取り組むべき理論的課題や付け加えるべき論点について議論するワークショップやシンポジウムに参加した。

平成 27 年度は、日本と韓国のポストコロニアル文学研究において、現在、二項対立的認識論的枠組みがいかに変容しているのかを比較検討するために、在日朝鮮人文学に関する研究の収集・分析を行った。韓国におけるポストコロニアル文学研究は、その分析対象が植民地期の文学だけでなく、1945 年以降の在日朝鮮人文学作品までに広がってきている。そのため日本と韓国における在日朝鮮人文学の先行研究の収集を行った。先行研究の特徴としては、韓国では、2004 年ごろから「ディアスポラ」という観点から在日朝鮮人文学を論じる研究が急速に増え始

めていることがわかった。日本においても、同時期に「ディアスポラ」を用いた在日朝鮮人論や文学研究が増加し始めている。しかし両国における「ディアスポラ」という観点からの在日朝鮮人文学の研究は、「ディアスポラ」概念に充填される意味内容の違いもあり、植民地問題が必然的に惹起する支配/被支配、協力/抵抗といった二項対立的な認識論的機制に対する論じ方の差異として現れていることを明らかにした。

平成 27 年度の研究成果は、1) アジア現代思想計画 MAT 青年フォーラム(一橋大学、2015/8/2-3)、2) 「在日朝鮮人文学における私」(韓国・東国大学 2015/9/12)、3) 『火山島』翻訳記念 金石範シンポジウム(成蹊大学、2015/11/8)、4) アジア現代思想計画 MAT 「平和と連帯」の思想史 バンドン会議/第三世界 60 年・沖縄土地闘争 60 年(沖縄大学、2015/11/13-15)、5) 日本近代文学会「在日朝鮮人文学に関するパネルセッション」(早稲田大学、2015/11/24)で報告した。報告の内容は、小説家の金石範や詩人の金時鐘についてや、1950 年代はじめの在日朝鮮人組織の動向などを中心としたものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

呉世宗「金時鐘の詩と「自伝」 『朝鮮と日本に生きる 済州島から猪飼野へ』を中心に」『韓国学研究』no.39、2015、pp.27-48. 査読無し。

呉世宗「『新潟』を読むために」『季刊済州作家』no.45、2014、pp.45-68. 査読無し。

呉世宗「国民文学の境界地帯」『統一と平和』vol.6,no.1、2014、pp.155-187. 査読有り。

呉世宗「許南麒の日本語詩についての一考察 歴史物語の構築と歴史からの撤退」『論潮』6号、2013、pp.184-201. 査読無し。

[学会発表](計 7 件)

呉世宗「金時鐘の詩を新たな可能性に開くために」日本近代文学会 在日朝鮮人文学に関するパネルセッション(早稲田大学、東京都、2015/11/24)

呉世宗「1950 年代前半の在日朝鮮人たちの社会運動」アジア現代思想計画 MAT、「平和と連帯」の思想史-バンドン会議/第三世界 60 年・沖縄土地闘争 60 年-」オープン・フォーラム(沖縄大学、沖縄県、2015/11/13-15)

呉世宗「金石範作品における闇について」成蹊大学アジア太平洋研究センター学術大会、『火山島』翻訳記念 金石範シンポジウム(成蹊大学、東京都、2015/11/8)

呉世宗「金時鐘の詩と「自伝」 『朝鮮と

日本に生きる『濟州島から猪飼野へ』を中心に、東国大学文化学院定期学術大会、「在日朝鮮人文学における私」シンポジウム（韓国・東国大学、2015/9/12）

吳世宗「『新瀉』を読むために」、濟州作家会議、濟州作家会議ワークショップ（韓国・濟州島、2014/5/31）

吳世宗「白樂晴の民族文学論について」、MAT青年フォーラム、アジア現代思想計画 MAT、（韓国・ソウル大学、2013/8/25-26）

吳世宗「許南麒の詩を読む」、琉球アジア文化専攻公開セミナー、琉球大学法文学部国際文化学科琉球アジア文化専攻（琉球大学、沖縄県、2012/10/8）

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吳世宗 (OH, Sejong)
琉球大学・法文学部・国際言語文化学科・
琉球アジア文化専攻・准教授
研究者番号：90588237

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：